

大学出版

No.

2004.9

62 秋

大学と社会を結ぶ知のネットワーク

特集

教科書を思う

大学の「教科書」の昔と今 * 竹内 洋 ——2

アメリカの大学教科書 * 松井 範惇 ——6

ショートエッセイ◆教科書の思い出 ——10

秋山 仁/大庭 健/尾崎 彰宏/海保 博之/斎藤 清明/
杉本 良夫/藤原 仁志/森 光

● 連載

装丁の四季——秋 ガイドブックの装丁 * 大貫 伸樹 ——表2

古書のある風景 3 古版本の語るもの * 村井 則夫 ——18

歩く・見る・聞く
知のネットワーク 35 岡本太郎記念館 ——20

大学出版部ニュース ——22

関西支部だより ——表3



あまり自慢できる話ではないが、仕事のサイクルが短いせいもある。私は、関東圏から外へ旅行をしたことがあまりない。それでも旅行用ガイドブックはたくさん持っている。たとえ近所を散策するときでも、しっかりと下調べをせずにはいられないからだ。初めての海外旅行でタイに行ったときは、国の歴史や寺院の由来、宿泊施設や食べ物などを調べるなど、その大変さは推して知るべしである。

私が大切にしている蔵書に『日本名勝写生紀行』第二巻、第三巻(中西屋書店、明治四〇、四三年)という古いガイドブックがある。明治三八年から四五五年に作られた全五巻のうち二巻である。黒田清輝門下で白馬会所属の新進画家たち岡野栄、中澤弘光、山本森之助、跡見泰、小林鐘吉の五人が、紀行文と二四〇点に及ぶ挿絵で案内する。第二巻の巻頭口絵には、個性的な五人の似顔絵が岡野栄の筆によって描かれている。挿絵のうち四四点は、夏目漱石『心』の木版を彫った名彫師・伊上凡骨の手になる一頁大の手摺多色刷木版画であり、これらの彩色木版画の挿絵だけでも他には類を見ないほどの豪華さである。第三巻見返しに彩色木版画・京都案内図もまさに圧巻といえる。たかが書物のために五人の画家達に全国を写生旅行をさせ、たくさん絵を描かせるなど、製作費に糸目をつけない太っ腹な企画を断行したのは、当時中西屋の支配人をしていた伊村金之助である。装釘を担当した岡上儀正は、明治六年に

装丁の四季
秋

ガイドブックの装丁

おおぬき しんじゅ
大貫 伸樹 (ブック・デザイナー)



上:中澤弘光ほか『日本名勝写生紀行』第3巻(中西屋書店、明治43年)、見返し絵図・中澤弘光
下:『風俗画報』(東陽堂、明治35年)、挿絵家・不明

印刷局に御雇教師として洋式製本を伝えたバスターソンの直弟子の一人であり、伊村はキャステイニングにも鋭い眼を持つていたようだ。

『日本名勝写生紀行』定価四円五〇銭は、同じ頃に発行された豪華な本として知られる夏目漱石『虞美人草』一円五〇銭や、明治三九年の巡査の初任給十二円(『値段の風俗史』朝日新聞社)に比べてもかなり高価で、旅費よりも高かったのではないかと思われる。こんなに豪華なガイドブックを携帯して出かける人とは一体どんな人達だったのか？ 当時の旅は、一世一代のイベントだったに違いない。など

と思いを巡らしていたら、折しも『風俗画報』(東陽堂、明治三五年)に、「旅行」という題の挿絵を見つけた。この旅人がガイドブックを持つていたかどうかは分からないが、旅は裕福な人たちの娯楽だったようだ。この絵を見るかぎり、明治になって自由に旅行が出来るようになったとはいえず、交通の便も宿泊所も治安も悪かっただろうし、懐具合は言うまでもなく体力も必要で、私の海外旅行出発よりもはるかに大変な思いで出かけたのではないだろうか。と他人事ながら溜息が出た。

遠くに旅するのが億劫な私にとって、『日本名勝写生紀行』は、机上にありながら時空を超えた明治の観光地にまで、画家達が案内してくれる最高のガイドブックなのである。

特集

教科書を思う

人類は、世代を越えて知識を語り継ぐ知恵を持っていきます。文字はその最たるものであり、本はその主要な媒体といえるでしょう。一般的には、知識の普及・継承という観点に立ったとき、私たちはその本を「教科書」と呼んでいます。

小学校や中学校で何の疑いもなく利用していた検定教科書も、社会に出てから必要に迫られて購入したハウ・トゥ本も、教授が指定したから買ったのに講義では一回も開かなかった専門書も、みな教科書です。

今号の特集では、大学出版部にとって身近なテーマである「教科書」を取り上げました。教育を取り巻く環境が激変の時代を迎えている今、教育・学習ツールとしての首座を守り続けてきた教科書も新たな役割が求められているのではないのでしょうか。

大学の「教科書」の昔と今

竹内 洋

(京都大学大学院教育学研究科教授)

高校時代までの教科書のイメージをもっている人が大学生になってびっくりするのは、教科書の意味が大学ではずいぶんちがうことである。教科書「を」教えるのではなく、教科書「で」教えなければならぬといわれるが、それでも高校までは、教科書にそった標準的知識が教えられるから、授業と教科書の乖離は少ない。ところが大学では、教科書に指定された本と授業内容の乖離は大きい。

いまは、少子化や改革で大学もかなり学生本位になったから、教科書と授業の乖離も少なくなったが、二〇年以上前までの日本の大学は教師本位の大学であったから、大学の教科書は教科書というよりスキャンダルじみてさえた。わたしが大学教師になったのが、いまから約三十年ほど前一九七三年だった。石油ショックでトイレットペーパーの買占め騒ぎがあったところであるが、教科書をめぐって本当に驚いたことがある。

私立大学は学生数が多いので、学年末の試験ともなると

授業担当以外の教師も試験監督にかりだされる。わたしと二人の専任教師が、非常勤講師の「〇〇社会学」の試験監督にいった。そこでかなり驚いた。「教科書持ち込み可」という条件はあったにしても、この非常勤講師の先生が書いた学位論文をまとめた上下で数千円——いまの物価に直したら、一万数千円——の本を、数百人が持ち込んでいたからである。試験が始まると、この日か前日、大学の近所の本屋で購入し、試験開始とともに、はじめて「教科書」を開くものが多いせいか、バリバリという紙の音さえするのである。

試験がおわってから、同じ試験監督をした年輩の先生に「あれは、ちょっとひどすぎますよね。学生がかわいそうだ」といったところ、かえってきた答えがふるっていた。

「きみ、非常勤講師手当ては安いのだよ、ああして毎年学期末に上下の何千円もする本が何百冊か売れるからこそ、〇〇先生も、うちの大学にきてくれるんだ」。さらに、こ

の先生はこうつぶやいた。「なあに、ほとんどの学生は授業にでてこないのだから、四単位を数千円で買えるのなら、安いもの」と。教科書持ち込み可という条件を呈示する先生にありがちなことだが、授業にほとんどでていなくて、「教科書」の丸写しに近い答案を書いても、「可をあたえるからである。ということ、学生はほとんど授業にでなくて、その間、アルバイトなどをする事ができる。試験のときにアルバイト二日分くらいのお金を支出すれば、単位がとれるということになる。だから、安いものなのだというのが年輩の教師の説明だった。〇〇社会学の概論とは遠い、専門的な学術書を上下で買わされる学生がかわいそうだとおもったものだが、そんな裏があったのかとあきれも、妙に感心もした。

そのあとしばらくして、この大学の近くに古本屋へ立ち寄ったときに、また妙なことにであった。この大学の教科書とおぼしき本が、二束三文の値段でぞっき本コーナーに積んであった。手にとってみると不思議なことに、奥付の前の頁に、ミシン目が入っている。しかも、古本屋にある本は、ことごとくミシン目の部分が破られてしまっているのである。

さきほどふれた教科書使用模様がショックだっただけにひょっとしたら、これも教科書を学生に買わすための仕掛けではないだろうか……とおもった。そこで、くだんの年輩の先生に聞いてみた。

わかったことはこうだった。教科書を確実に売るために、巻末にミシン目を入れたレポート用紙をつけていたのである。単位認定にかかわるレポートを提出するためには、この教科書につけてある専用のレポート用紙を使わなければならない。市販の原稿用紙などに書いても受けつけない！のである。教科書を古本でかたり、先輩からもらったりしても、「専用」レポート用紙は使用されてしまっているから、駄目。内容がまったくかわっていないのに、レポート用紙確保のために新本を買わなければならないという仕掛けがほどこされているのである。よく考えた仕組みであるが、あこぎなやりかたではある。さすがに、わたしが赴任した当時は、こんな教科書を使っている教師はいなかったが、わたしの赴任数年前までは、結構、この種の商魂逞しい教師がいたらしい。しかも、ミシン目を入れた専用レポート用紙つき教科書は、この大学にかぎらなかつたようである。

わたし自身の京都大学での学生時代は、教科書をめぐってここまでのあこぎなことはなかったが、問題はあった。たとえば、教養課程の政治学の授業で、担当の教師の翻訳した本が教科書になっていた。教科書が翻訳であつてもよいが、政治学入門の概説書であればの話である。しかし、指定された教科書は、イギリスのある特定の政治学者の政治学説についての解説書である。これでは政治学入門書というより、特定のテーマの専門書である。しかも、授業で

は、この「教科書」を説明するわけでもない。単に販売用に教科書として指定されているだけというありさまだった。

そんな時代のせいとか、わたしがさきの大学に赴任早々、ほとんど聞いたことのない出版社の人が研究室を訪ねてきて、「先生、社会学の教科書を書きませんか」と誘いを受けた。わたしのような名前も知られていない者をどうして執筆者に選んだのかが不思議だった。ひょっとしたら、潜在能力を認めてくれたのだろうかと都合よく考えたりしたが、もちろんそんなことではないことはすぐわかった。

出版社の人は、わたしがこの大学で、昼間の二つの学部と夜間の一つの学部で教養の社会学を教え、受講生が八百人ほどいることだけはしっかりつかんでいた。著者は誰でもよい、販売数が確保できるから書かせてあげようというのである。「入門書を書くほどまだ勉強がすすんでいませんし」とことわると、「でも、先生も、専門書をまとめるでしょう。教科書としてつかっていただくということであれば、かならずうちでださせていただきますから」と丁寧な誘いさえ受けた。

大学教師は、研究業績稼ぎのために本を出版しなければならぬ。しかし、販路はない。それで、売れもしない本を教科書として学生に買わせていたのである。教科書というのは、その分野の標準的な知識の体系をまとめたものだが、特定の専門的研究書を、教科書という名で単位と引き換えに、学生に押しつけ販売することがおこなわれていた

のである。

むろん、こういう時代でも教科書の名にふさわしい本もあったが、単著はすくなかった。複数の著者になる編著が多かった。それも二、三人というのではなく、章ごとにことなつた著者が書いているものがほとんどだった。異なった著者のせいでも、文体も論のはこびかたもちがっており、また前の章との連続性もわかりにくいものだった。しかも、初学者には難解なものが多く、頁数も少ない。教科書をその学問分野の辞書がわりにできる状態からはほど遠かった。

そんなときに、在外研究でアメリカの大学にいった。五百頁以上もある大判のポリウームのある教科書が使用されているのが印象的だった。英語を日本語に直すと、約一・五倍の分量になるから、日本語の教科書にすれば、七〇〇頁以上にもなるものである。学生が芝生でこの大きな教科書を読んでるのは、アメリカの大学によくみられるキャンパス風景である。しかも、日本の大学の教科書とちがって、単著が多く、複数著者といっても二人、多くても三人である。同じ著者が書いているのだから、章と章の連関もわかりやすい。盛りだくさんだから、大概のことは教科書に記載されている。しかし、ポリウームがあるだけに学生が全部読むのは大変である。実際、学生はこの大判の教科書全部を読んでいる訳ではない。速読したり、必要箇所だけを讀んでいる。しかし、教科書が充実しているから、

辞書代わりにもできる。これだけをきっちり勉強すれば、その学問の標準知識は習得できるのである。

もちろんポリウムがあるだけに値段は高い。現在では六〇ドル前後といったところだろう。高いものでは一〇〇ドルをこえるものもある。しかし、教科書によっては、ペーパーバックもあるし、大学の本屋にいけば、新本と並んで古本も売っている。そして新本はいうまでもなく、古本も試験が終われば売ることができ。したがって、値段の半分ぐらいが学生の実質負担となる。

アメリカから帰ってきて、あらためて日本の大学の教科書の駄目さかげんをおもい、日本で翻訳が出されたアメリカの社会学の教科書を使用したこともある。たしかに、社会学の概念や分析法を知るにはよいのだが、データや事例はアメリカ社会である。日本の学生には、リアリティが乏しい。やはり、日本社会を準拠とした教科書が必要なのである。

いまでは、日本の大学教科書事情もわたしの大学生時代や新米大学教師時代からくらべると、大幅に改善された。学生からの授業評価もあるせいで、冒頭に紹介したようなスキャンダルじみた話はもうほとんど聞かれなくなった。大学の教科書にも練習問題がついていたり、コラムがついていたり、最近では、多色刷のものさえあらわれている。初学者にやさしい教科書にはなった。しかし、章ごとに異なった著者が執筆しているという事情は、かわらない。単著

はあっても薄い本が多いこともかわらない。

単著の厚手の教科書が少ないのは、ひとつの学問でもそれぞれの下位分野がこれだけ専門化すると、一人の著者の手におえなくなるといふ事情もあるが、もうひとつは、すぐれた教科書を書いて、専門書とみられなく、研究業績とみられないため執筆の誘因とならないこともあった。日本の大学が教師本位であったことにふれたが、それは同時に教育者本位ではなく、研究者本位主義でもあった。そんなことがポリウムのあるすぐれた教科書を執筆する意欲を殺いだおおきな原因である。

しかし、近年は、大学教師の採用や昇任人事において、研究業績だけでなく、教育業績も参照するようになってきた。すぐれた教科書執筆の誘因構造ができてきた。最近の授業は、パワーポイントやビデオを併用しながらおこなっている教師も多い。だから、こうした視聴覚教材とも連動した、CDやDVDつきの新しい教科書があらわれてもよい時代となった。日本大学の教科書は長い停滞の時代を経て、大きな革新の時代を迎えつつある。学生本位の教科書市場がみえてきたのである。

アメリカの大学教科書

松井 範惇

(山口大学大学院東アジア研究科教授)

アメリカの都市、町へ行く時、私はできるだけその土地の大学を訪れる事に行っている。その時必ず行く所は、図書館と大学書店である。図書館では入っている学術雑誌の種類と数を見て、ITアクセスを調べる。書店では教科書のコーナーへ足を運ぶ。全ての学部 of 全科目のその学期の教科書がびっしり並べられ積まれている。棚には、授業科目名、講師の名前、教科書名、副読本、売り切れた本はいっ入荷するか、などが書かれたカードが整えられている。それらを眺めて本を手に取り書棚の間を歩き、各授業で先生方がどんな授業をするのか、シラバスの組み立てはどうなっているか、学生へのアサインメントはどうするのか、論文提出はあるのか、などを想像するのはとても楽しい。

時には床に座り込んで読みふける事もある。こんな楽しい時間の過ごし方があるとは、TA(助手)としてハーフタイム(週二〇時間)で教え始めた時には知らなかったし、フルタイムで自分の授業を始めた一九八三年にも分からな

かった。一九八六年に三つ目のリベラルアーツ大学で教えるようになって、ようやく教える事の楽しさと恐ろしさに分かるようになった。大学書店に並ぶ教科書や副読本の山これが何故毎学期、授業開始一週間前から出るのか、それがどのような意味があるのかがその頃になって分かってきた。学部レベルの授業は、アメリカの大学では講義(レクチャー)だけのものは殆どない。授業(科目)は、コースやクラス、または学習(ティーチング&ラーニング)といい、一方通行の講演や演説だけをする授業はない。教員が教える学生が学ぶだけではない。学生は他の学生に教え、教員にも教える。教員は授業を通じて学ぶ事も大いにある。そういうプロセスが大学全体で推奨されている。

アメリカの大学で教えていて、教科書の選択にはとても気を使った。それは何よりも、採用する教科書の善し悪しが、シラバスとともに、その授業の成否を大きく左右する

からである。その理由の第一は、教科書の質には敏感に学生の反応があることである。学生からポジティブな反応のある事は少ないが、逆にそれほどでもない教科書を使っていると、わかりづらいとか、どう読んでも理解できないというネガティブなコメントは必ずくる。特定の学生の勉強不足のせいではないことが見えてくる。第二は、その科目の目的、レベル、学生の準備などで適切な教科書を使っていないと、特にテニユアー前の教員の場合は、二年でもそのような事を続けてやっていると必ず首になる。それは、大学学部での授業では学生の理解を助ける事が教員の最大の任務・役目だからである。大学全体でそういう学生の学習体験を大事にする様々な仕組みがきちっとできている。教員はそのために雇われているのである。

アメリカにおける大学の授業で、教科書が大事な理由は他にもある。まずは、実験や学外授業、フィールド・ワークなどを中心とする科目以外では、教科書を使わない科目はないことである。多くの科目では出版社から出される多彩で良質な教科書がとて便利である。多くの教員は、教科書として出版されたものと、副読本として様々な種類のものを組み合わせ、自分の分野での面白い科目を構成しようとする。そのような教員のインセンティブ、大学側からの要請（評価）、そして学生からのフィード・バックは、質の高い大学ほどシステムとしてうまく働いている。

次に注目すべきは、大学全体の教員の質は、大学の命運

をも左右すること、その要は授業そのものであり、教科書・教材を使った授業の質にあることである。様々なファカルティー・ディベロップメント（FD）のプログラムで、新しい分野の授業に挑戦する教員への援助や、チーム・ティーチングの取り組みを進めたり、授業の改善の仕組みを考えたたりする。教員の全般的能力向上は良い授業をする要である。いかに良い授業をし、いかに学生に学ぶ意欲を起こさせるかは重要である。良い教科書の選択と適切な副読本、練習問題集などの組み合わせは、その大切な要素である。

新しく教員を採用する場合、研究業績はもちろんだが、どの分野・レベルであれ、教育実績、つまりそれまでの授業評価の記録を見ないで採用することはあり得ない。学生の授業評価のまとめとシラバス、どの教科書を使い、どのように学生に分かりよく教えたか、どのように授業を組み立てたかは、新任教員採用ばかりでなく、昇進やテニユアー審査でも極めて重要である。

一九八三年に初めてフルタイムで教え始めた時には、私はその前年四つの大学にポジションを探し、書類を出し面接をした。一九八五年から別の大学で教え始めた時は、その年の一月に、六つの大学で面接があった。一九八六年から教えたアーラム大学での職を得た時は、一九八五年秋から一二〇以上の手紙を出した中から合計約二五の大学と接触した。ほぼ全ての大学で、授業に関して教科書とシラバ

スについて質問でないことはなかった。私が何を考え、何を重点にし、いかに学生を大事にするかを考えているかを知りたいのだ。教員は、お互いに良い教科書、使いにくい教科書、自分の好みにあった副読本などについて議論するのを好む。

逆に、一九九二年一二月、カリフォルニア州アナハイムで開かれたアメリカ経済学会の年次総会では、私は三日間缶詰で一五人の面接をした。翌年の秋学期からアールラム大学で一人欠員を補充するためだ。政治経済学、労働経済学が教えられ、国際研究でも有用な役割を果たす人が、アシスタント・プロフェッサーのレベルで必要であった。研究に関する専門分野の面談項目以外に、現在のポジションで、どの教科書を使ってどのように授業を進めているか、今後どのように進めたいかを尋ねることは必須の確認項目であった。この面接の時の情報を学部を持ち帰って、他の教員と一緒に次の段階の候補者絞りをするのである。教科書の使い方を聞くと、その人の授業が分かる。

こうして、教科書選びはとても大事な役割を果たしていることが分かるだろう。大学教員が教科書を選ぶ際の、一つの側面は、おそらく日本では見えないものであるが、単に教科書そのものだけを選ぶのではなく、一セットとして様々なものが付随してくる。教師用のインストラクターズ・マニュアル、教師用の問題集(解答例付き)、学生用練習

問題集(解答ヒント付き)や、箱入りOHP集、または冊子、それらを集めたフロッピーやCDとか、事例集別冊子などが、教師用、学生用に用意されていて、授業に採用するとそれらのものが自由に使えるし学生にも便利である。

例えば、経済学の入門レベルの科目では、本体五〇〇―八〇〇ページの教科書に対して、全部ではその三―五倍のものがどさっと送られてくる。教科書本体もハード・カバーのもの、ソフト・バウンドのものと同様である。自然科学の分野では、八〇〇―一〇〇〇ページのもので教科書本体だけで、二〇〇ドルもするものも出ている。

さらに、副読本、練習問題集、重要参考文献集、などは大学院、専門大学院などでは欠かせない。これらを各出版社では、それぞれ得意な分野で、大学教員の必要性をにらみながら良いものを出してゆく。例えば、国際関係論などの分野では、世界の主要な雑誌、論文、新聞などの論説から学生にも分かりやすいものや重要なものを編集し、副読本として教科書の補完物となるものを出版する。これは教員にはとても有り難い、有用で意義のあるものである。

『フォリン・アフェアーズ』誌を出しているCouncil on Foreign Relations社は、教科書専門出版社ではないが、大学教員に働きかけて教員の教える科目の必要に応じて、同誌からの論文を集め、簡易製本にした副読本を必要な冊数(クラスの学生数)だけ作り、実費で提供するというサービスを行っている。これは版權と複製の問題を一挙に解

決してくれる。私も「日本経済論」を教えたとき使ったことがある。過去の論文をバラバラ集めて学生に読ませるより遥かに効率的だ。宿題にも使えるし、授業の討論にも良い材料になった。

アメリカの大学教科書では、出版側、教科書業界も大きな役割を果たしている。良い教科書、売れる教科書を多く出す出版社は、版を重ねることにより儲かるし、名声も高くなる。大手出版社のいくつかは、それぞれ教科書部門を持っており、他の部門の赤字を教科書部門の黒字で埋めることができる。他の物価に比べて教科書、書籍類の価格は、アメリカでは極めて高い。分野にもよるが、一〇〇―一五〇ドルする教科書もざらにある。毎学期学生は三、四科目とると、教科書代に五〇〇ドル近く支出する。

学生は一度使った教科書をその学期が終わると、大学の書店に売る。書店は、ぼろぼろになっていなければ、買って次の学期、次年度用に中古本として次の学生に売る。また、各大学の書店間で交換される。出版社側では、中古教科書ばかりが回って困るので、著者と相談し、「最新の現実問題をより多く取り入れ」、「新しいトピックを扱う」、「より学びやすい工夫を凝らした」、「最新の理論を紹介する」などのキャッチフレーズをつけて、三―五年で新版を出す。その時に、さらに売れるかどうか、使われる教科書かどうかの判断がなされるのである。

アメリカ大学の教科書出版に関しては、「出版社の徹底した対応」にふれなければならない。出版社は地域ごとに教科書担当の広報・宣伝の専門家を雇っており、かれらは年に一、二度担当地域内の大学を訪問する。教員に見本を配り、カタログを渡して新版の説明をする。教科書採用予定の科目を聞いて歩き、サンプル・テキストの注文を取る。カタログは分野別、レベル別、専門性の高さ、総合性などに分類されており、とても見やすい。授業用に良い教科書を探そうとする教員に対応しようとしている。

このように、アメリカの教科書事情は、大学教員側の良い授業をしようという需要サイドと、良い教科書、売れる教科書を出そうとする供給サイドの相互作用であることが分かるだろう。その接点は、授業そのものであり学生にある。それを支えるのは大学の競争という仕組みと伝統である。

日本の大学教科書は、多くの場合、教員の研究者としての研究成果をまとめた学術刊行物であるといわれる。そのため、授業で使うには教員にとっては不満が残り、学生にとっては消化不良のまま学期が終わるといわれている。日本の大学教科書は、教科書として書かれたものももっと出回り、教科書市場として広がることが望まれる。良い教科書の必要性は今後もますます大きくなるであろう。

人生を変えた運命の教科書

秋山 仁

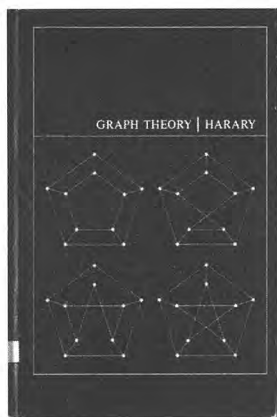
(東海大学教育開発研究所教授)

将来の可能性は何ひとつ無かった。指導教授には見放され、専攻していた偏微分方程式は難攻不蕩に思えた。いくら勉強しても先が見えない。真に「登れども登れどもまだ麓かな」の心境だった。そんな折、高校の頃に授業で興味を抱いた世紀の難問「地図色分けの問題」を思い出し、数学を諦める前に挑戦してみようと思った。図書館に毎日通い、この問題に関する本を物色し、遂にミシガン大学のフランク・ハラリー教授が著した Graph Theory に出会った。

この本は偏微分の本とは異なり、ほとんどすべての結果が過去二〇〇年の間に発見された斬新な定理だった。そのうえ、頑張れば自分にも解決できるかも知れないと思える未解決問題もたくさん紹介されていた。カパーがポロポロになるまで何度も何度も読んだ。何ページの何行目にどんな定理が載っているのかも諳んじられるほどだった(一九六九年に出版されたこの本はその後、日本語を含め数十ヶ国で翻訳され、グラフ理論のバイブルとまで云われる名教科書となった。)

やがて、「このまま日本にいても何も変わらない。グラフ理論の本場、米国に留学して、自分の可能性をトコトン突きつめてみたい。それでも駄目なら数学をやめよう」と思うようになった。当時、グラフ理論のメッカはハラリー教授が率いるミシガン大学だった。彼の教科書の一読者に過ぎない私だったが、厚かましくも、ハラリー教授に手紙を書き、「先生の下でグラフ理論を本格的に研究したい。是非採用して欲しい」と、思いのたけを込めた文章を下手な英語で綴った。数ヶ月しても返事はこなかった。半ば諦め、有名な大先生に、あのような失礼な手紙を書いたことを恥じ入りました。ある日、いつもの飲み屋でアブサンをおおり、安アパートに戻ると、オンポロの郵便受けの中に、赤と青の縞の封筒が顔を覗かせていた。差出人はハラリー教授だった。急いで封を切ると、「お前の熱意は気に入った。受け入れるからすぐにミシガンに来い」と書かれていた。

この本は、私の数学者としての人生を切り拓いてくれた運命の教科書である。



Frank Harary, *Graph Theory*, Addison-Wesley, 1969. [邦訳は一九七一年に共立出版より出版されている]

暇の教科書

大庭 健

(専修大学文学部教授)

不遜な言い方になるが、テーマが限定された授業においては自分の著書を教科書に使うことはあるけれども、一般的な講義でいわゆる教科書を使ったことはほとんどない。これには多分、遠く遡れば自分が学生時代に指定された教科書のほとんどが詰まらないものであったという記憶も与っている。

それでも大学で哲学・倫理学を講ずるようになった当初は、その頃「定評」のあった教科書を使ったこともあるが、そこに書かれていることを説明するよりも、書かれていることに反駁を加えたり、書かれていないことのほうを一生懸命に語るはめになることが多く、教科書を探し・選ぶ労を厭うようになるまでに、さしたる年月はかからなかった。その結果、講義の準備はけっこう厳しくなったし、何よりも大量に板書しなければならなくなったが、自分なりのノリで話せる、ということに優先するようになった。

これは、多分に私の個人的な事情が与っているが、哲学・倫理学という学問の性格にもよると思う。しかし、それでも、いい教科書があったほうがいいと思うこともある。とりわけ、講義の進行に応じて、少々違う文脈においてではあれ、同じことを繰り返し説明しなければならないときや、関連する科目で詳しく扱われることを説明しなければならないときには、そう感じる。

体裁は一見したところ中項目の小事典だが、いろいろなルートで項目を読み進ねていくと、多様な科目のミニマムの教科書としても使えるし、文献案内やwebサイトの紹介も丁寧で、レポート作成の手引きとしても結構使える。そんな手軽でお洒落なスタイルな本があれば、それなりに各所で重宝がられはしないか……。じつは本学の出版企画委員会ではこんなことも話し合い続けていて、ただ実際に作るとなると、多様な学生の目線にたって、かつ教科書として使う人間の多様性を考慮して、基本的コンセプトから始まって、盛り込むべき内容、記述のレベル、文体などなどについて試行を重ねねばならなくなる。なかなか厄介なものです。

現代にふさわしい「教科書」の使命とは

尾崎 彰宏

（東北大学大学院文学研究科教授）

西洋美術史を専攻した私が、概説の教科書として手にしたもののうちで、今も手元においているものとしてH・ジャンソン『美術の歴史』（美術出版社）がある。原書が改訂されたのを機に改訂され、私が学生時代に利用したものよりも読みやすくなり、二分冊になっている。現在でも西洋美術の通史としてはスタンダードである。西洋美術の流れを知る上で欠くべからざる作品が網羅的に集められていることはもちろん、なんといっても図版が豊富なことがうれしい。頁を繰っているだけでも各時代、地域で産み出された芸術作品のイメージや作家像が鮮明に形づくられていく。

しかし学生時代に出会った教科書は、教師の授業を補完するものであったり、通説を敷衍したり、講義とは別にその学問領域を自力で概観するためのものであるものが多かった。もちろん授業の内容を理解するのに便利であった面は否めない。しかし、どうしてもオムニバスの性格がつきまとい、複数で執筆している場合など、記述にばらつきが目立つという印象をもっていた。私の場合、当該科目の履修が終われば、教科書も用済みとなり、二度と手に取らなかつたものも少なくない。それだけに、大学の授業における「教科書」はどうあったらいいのだろうかという問いを、学生時代から折に触れて反芻しつづけてきた。

そんな思いを抱いていたせいか、教師になって一度だけ教科書づくりに積極的にかかわったことがある。『西洋美術への招待』（東北大学出版会）である。そのささやかな経験から、教科書は、授業を支える脇役でありながらも、それに終始するものではなく、自律した価値をもつものでありたいと思う。明確なコンセプトを打ち出し、そのイノベーションによって読者の共感を誘うような工夫が必要だ。それには、今なぜ、その教科書が編纂されるのか、を問う理念の切実さがないとてならない。現代の教科書の使命は、既成の知識の反復ではなく、現代という転換期を描き出す、知の本質を問うものであるべきではないか。

思い出の教科書

海保博之

〔筑波大学人間総合科学研究科
心理学専攻教授〕

大学生だったのは四四年前。その時使った教科書を思い出してみた。思い出せたのは、高木貞治編『心理学』（一九五六年、東大出版会）と岩原信九郎著『教育と心理のための推計学』（一九五七年、日本文化科学社）の二冊だけであった。なぜこの二冊の教科書が思い出せたのかというと、一つには、要するによく使ったからだからである。授業の際はもとより、大学院入試の受験勉強のとき、教員になってからも、授業の下調べや原稿書きなどで折に触れて参照してきた。まさに座右の書であった。思い出せたもう一つの理由は、やはり、その教科書を使った先生（いずれも故人）の思い出があるからである。

高木・心理学を教科書に使ったのは、小笠原慈英先生。教科書そのものにもまわる思い出はないが、授業の随所で自作のデモ教材を使って授業の工夫をされていたのを思い出す。（なお、東大出版会ニュース（NO. 75）によると、高木・心理学の改訂三版は小笠原先生が編者だったらしい。）

一方、岩原先生は、東京教育大学においてまもなくの頃で、当然、自著を使われてのアメリカン・スタイルの熱烈講義であった。宿題、クイズ、黒板での問題解きなどをまじえての授業、さらに厳格な試験は、当時の大学の授業では新鮮であった。大学ではみずから勉強した授業もいくつかあるが、岩原・統計学の授業は、唯一、勉強を「させられた」授業だった。余談だが、家内は、大学の成績で唯一「C」をつけられたのが岩原先生の統計学だけだったといって、今でも悔しがっている。

両方の教科書ともさすがに最近は手にとったことはなかった。あらためて研究室の書棚から引き出してみると、古色蒼然としている。中を開くと、下線があたりこちに引かれてあり、書き込みもある。使い込んだことがよくわかる。

（注）高木・心理学は鹿取・杉本編の改訂版として、また、岩原・推計学はほぼ初版のままの形で、共に今でも脈々と使われ続けている。

思い出の教科書

斎藤 清明

（人間文化研究機構総合地球環境学研究所）

朝一番の講義なので、よく遅刻した。欠席もたびたびだった。受講生は私を含めて七、八人だが、まじめに出るのはせいぜい数人。冬には先生が石炭ストーブを焚いて待っていたこともあった。

京都大学農学部農林生物学科、今村駿一郎教授の「植物器官学」の講義。同学科の実験遺伝学か応用植物学の講座にすすむ学生には必修科目だった。私が受けた一九六六年度後期は、定年直前の今村先生にとって最後の講義にあたったが、私たちがそれに気づいたのは、もう年度末になってからのこと。いわんや、先生はカワゴケソウの発見者だと知ったのも辞められた後のことである。

今村先生が教科書にと示されたのが、郡場寛著『植物の形態』（岩波書店）。郡場寛（一八八二—一九五七）は京都市帝大理学部植物学科の初代教授で今村先生の師にあたる。郡場は退官後、シンガポールの博物館長を務め、戦後引き揚げて著したのが本書で、最初の著作。一九五一年刊で定価六〇〇円と高かった。

二六七頁すべてを仲間たちと青焼きにして複写し、簡易製本したところまではよかった。ところが、ほとんど読むことはなかった。植物の形を幅広く取り上げた形態学の名著とされるのだが、生意気盛りの学生にとって、古くさい内容だと敬遠したのである。当時は、これからはDNAの生物学だという風潮なのだから。そのころ刊行が始まったばかりの「現代の生物学」（岩波書店）の第一冊『細胞の構造と機能』などと比べると、古色蒼然としているように思えた。そして、次々に出てくる新しい生物学関係の刊行物の中に埋もれさせてしまった。

しかし、郡場の名は記憶に残っていた。卒業後、ジャーナリズムの世界に入ったが、日本占領下のシンガポールでの日英の科学者たちの交流の主役は郡場だと、相手の英国人科学者から取材することになる。「生きていた化石」メタセコイアの物語を著した際にも郡場に登場してもらった。そうして、植物のさまざまな姿に出会うたびに、あらためて書架から取り出したのである。

教科書は必要だろうか

杉本 良夫

(慶州ラトロップ大学人文社会学部教授・社会学)

小学校の頃、きちんとした教科書で勉強したという記憶がない。私は戦後教育の文字通り第一世代で、一九四六年四月に京都市立御室小学校に入学した。まだ国民学校の余韻が残っていた頃のことだ。軍国主義的な表現を墨で消した教科書を読まされた思い出だけが残っている。わらじを履いて登校した時代だ。

その後転校した京都市立衣笠小学校で、五年と六年の担任は浅野寅夫先生だった。教科書に頼らない授業だったことだけを覚えている。毎日の宿題は「問題日記」を書くことだけだ。日常生活で疑問に思ったこと、不思議だと考えたことなどを記録して、それを毎朝提出するという日課だった。

浅野先生は生徒の「問題」のいくつかを選んで、毎日の授業を構成した。例えば「雨はなぜ降るのだろうか」という理科の疑問から一日が始まる。私たちは雨量の計算を材料にして算数を学び、各地の降水量を比較して地理の勉強をしたものだ。雨を構成部分とする漢字や熟語探しをするうちに、一日が終わった。分からない問題に直面すると、自由に図書室へ行ったり、実験をしたりしたことを思い出す。

教科書を一ページずつ学んでいくというのは全く違う。日常生活で見つけた小さな問題を、一步一步解いていく楽しみがあった。その過程で、国語、算数、社会、理科などに区分けされない勉強の仕方を習ったように思う。

大学を出て社会人生活を送ったあと、私は日本を離れ、アメリカに六年、オーストラリアで三十一年を過ごすこととなった。英語圏のほとんどの国では、日本の文部科学省に該当する役所がない。初等・中等教育は国レベルではなく、地方レベル、州政府の担当だ。使われる教科書も地方によって違う。課目によっては、学校ごとに教員自身が適当と思われる本を選ぶ。全国共通の教科書はまれだ。私たちの子供たちも、教科書があつてないような小学生時代を過ごした。

教科書のない学校というのが、私にとっては小学校の思い出の原版である。その記憶が、日本を離れてからの私の思考様式を支えている。

電車の中の講師

藤原 仁志

(宇宙航空研究開発機構 総合
技術研究本部 航空環境技術開発センター主任研究員)

航空エンジン関係の仕事にたずさわっている私は、直接の関連はそれほどないものの、空気の流れなら、エンジンの中も地球の周りも原理は同じだろうとの考えから、気象学に興味をもっていました。

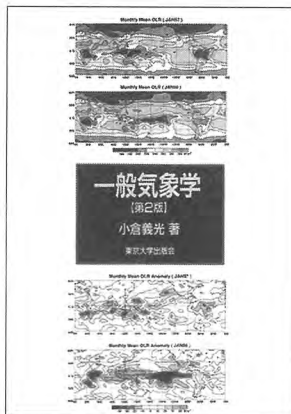
学生時代だけではなく、社会に出てからも、勉強しなければならないことはたくさんあります。しかし、日々の業務をこなしながら長期間講義を受けることは難しいのが現実です。そこで、通勤途中やちょっとした待ち時間に勉強をするということがよくあります。そして、その時に欠かせない「講師」が「教科書」であり、私の場合には、小倉義光著『一般気象学』（東京大学出版会）だったので。学生時代にも単位取得のために数多くの教科書を読みましたが、印象に残っているものは、結局、卒業後に読んだものであるというのは少し皮肉なことです。

本書は、はしがきにもありますが、「すべてのことをもれなく記述するというよりは、記述された項目はできるだけ理解しやすいように、つまり基本的な法則から出発して説明をていねいにしていく」という方針が徹底しています。一般には、所定のページ数で、この方針を適用しすぎると、読み物のようになってしまいうこともありま。しかし本書は、上記の方針を貫きつつも、重要な項目には抜けがないよう配慮されているのです。教科書を書く場合には、この相反する二つをいかに両立させるか、ということが課題となりますが、本書はその点にも配慮が行き届き、私にとっての「良い教科書」＝「良い講師」だったので。

一年くらいかけて、大半を電車の中で赤ペン一本を片手に読み耽り、ほとんどは車内で理解できました。また、「空はなぜ青いのか」「飛行機に乗って上空に行く」と紫に見えてくるのはなぜか」など、日常会話の中で紹介しても具体的かつ興味深い話題が豊富で、熱中して乗り過ごしそうなこともあります。

不思議なことに、毎朝見る空の青さも、理由がわかると昨日とは違ってみえてくるものです。

小倉義光著『一般気象学』（第2版）東京大学出版会



教科書の中の轡十文字

森光

(中央大学法学部助教授)

小学校から大学まで、数々の教科書を与えられてきた。その多くはもう手許にはない。処分を免れた教科書も、日々増大する書物におされ、次第に隅へと追いやられ、それを捜す作業は、既に「発掘」と称し得るものとなっている。しかし、一冊だけ、研究室の書棚の特等席に並び続けている教科書がある。大学一年の時の民法の教科書、四宮和夫『民法総則』（第四版 一九八六年）である。

今、この本をパラパラとめくってみると、至る所に、薩摩の島津家の家紋である轡十文字のマークがつけられている。大学一年生の頃、この本を携えて、図書館の日当たりの良い席へと行き、この本に向かい合ったものであった。しかし、当時は、ただ頭から順に読み進める以外に本の読み方を知らなかったため、すぐに大きな壁にぶつかった。書いてあることがほとんど理解できなかったのである。ターヘルアナトミアの翻訳に挑戦した前野良沢や杉田玄白の苦勞もかくの如きかと思う程であった。そこで、彼らをまねて、理解できない個所に轡十文字マークを付していったのであった。そして、このマークはたちまち増大し、ついにはこの本は放棄されることとなった。この本が再び目の目をみたのは、その三年後であった。当時、大学院への進学を志し再度民法に取り組んでいた時、ふとこの本のことを思い出したのである。この時は一年生の時とは異なり、この本は情報量溢れる好著として、私の前に現れた。以後、今日に至るまで、この本は研究室の特等席に並び続けている。

このような本を学生は好まない。多くの学生にとって良い本とは、わかりやすく噛みくだいて書かれた、すぐに試験の役に立つ本であろう。そして、そうした方向を目指す出版物は年々増大している。しかし、そうした本にしか接していなければ、難解な本から必要な情報を読み取る力をつけることはできない。かの民法の先生は、本物の読書力を身につけて欲しいとの願いを込めて、敢えて難しい本を大学一年生に与えたのかもしれない。

古書のある

風景

「こじよのあるふうけい」

3

古版本の語るもの

村井 則夫

撮影：別宮幸徳
Context: GI Plamar, Shinn



世に初版崇拜というものがある。私自身は、何が何でも初版本というほどの特別の思い入れはないのだが、何事にも「初心者^{ビギナーズ}の僥倖^{ラック}」というものはあるらしく、十八世紀刊本などに興味をもった最初の頃に、「オシアン詩集」(「フィンガル」(一七六二年)、『タイムローラ』(一七六三年))の初版などを入手する機会に恵まれた。ロマン主義の嚆矢^{はしり}となった著作の初版などを手にすると、二〇〇年以上の歳月を隔てて、公刊当時そのままの姿を目にする不思議さに打たれ、やはりそれなりの感慨が湧いてくる。マクファーソンによって公刊されたケルトの古代英雄叙事詩「オシアン詩集」は、そこに謳われる勇壮で壮絶な戦闘、雄大で荒涼たる風景、独自の憂愁と情緒によって、ゲーテを熱狂させ、ナポレオンを魅了し、ヨーロッパの文化的感性を塗りかえるほどの影響を及ぼしたと言われる。こうした経緯を知るにつけ、その発端となった著作の初版には、その後の歴史の潜在的な力が濃縮され、影響の回路がそこから無数に延びているかのような印象を抱いてしまう。

初版に限らず、刊行当時の古版本というものは、その版でないとは分からないことを教えてくれる場合がある。ここでは、オシアン詩集初版と同時に入手した、トムソン『四季』の初版本(一七三〇年)を取り上げてみよう。神学的・自然学的知見を盛り込みながら、四季それぞれの自然の情景を巧みに描写し、自然の秩序や精妙な機構を称えた『四季』は、ハイドンのオラトリオ『四季』の底本になったほど人口に膾炙し、多くの版を重ねた作品だが、その初版の四折版には、それぞれの季節を表す堂々たる銅版図版が付されていた。しかもその図版は、単に詩の一節を忠実に図解するというよりは、春夏秋冬のそれぞれを寓意的に表しており、感性の点では十七世紀のバロックの余韻を響かせながら、絵画の様式の点では十八世紀な雰囲気をもった独特のものである。これを例えば、十九世紀に出された『四季』の刊本に、当時の挿絵画家として有名なストザードが付した図版

岡本太郎記念館



右：建物外観。凸レンズ型の屋根が緑の中から顔をのぞかせる。

左：アトリエ。高い天井に接する回廊に、本のつまった書棚が見える。

中学を出るとき、仲間と企んで、おのれの卒業のために祝電を打った。差出人を「岡本太郎」として。まさかと思ったが、これが式典で堂々と読み上げられた。子供の悪戯だが、これはこれでハプニング的な作品として僕らは満足していた。

思えば「芸術」を初めて体験した記憶は、ピカソでもセザンヌでもなく、岡本太郎だった。彼の思想など微塵も解さなかったが、同時代にその爆発を見て、その火の粉を浴びた（彼は誤解を受けることを承知でメディアに登場し、はたして僕たちは誤解したのであった）。稚拙な方法ながら、なにかパフォーマンスによって観衆を驚愕させようとした僕らにとって、祝電の送り主は岡本太郎でなければならなかったのである。

数年して東京青山の岡本太郎記念館を訪れ、画伯の霊前に、かつてお名前を無断で拝借した無礼を詫びた。記念館には超リアル岡本太郎ろう人形がある。小さい目玉をひん剥いて両手を広げ「ン……ナンダコレハ」という、あのポーズでスツクと立っている。その人形に向かって一礼。

ここは、一九九六年、八十四歳で逝くまで、岡本太郎のアトリエ兼住居だった。一九五三年から約四十年にわたって彼が生活した空間である。したがって、作品を展示してはいても、「記念館」の名のとおりに厳密には美術館ではない。しかしここでの体験は、ツンとおすましました美術館で岡本の「名画」を鑑賞するのとはわけが違う。神棚にまつりあげられ、日常から遊離してしまった芸術・伝統を批判し、徹底的に捉え直そうとしたのは、ほかでもない岡本太郎だったのだ。あるじ不在の邸宅に残された作品たちが、岡本の言葉を体現するように未だ衰えぬエネルギーを放つ。加えて言えば、ここはそもそも、岡本一平・かの子・太郎の一家が永く生活した場所。この土地には濃厚な地霊が宿っている。

岡本一家の旧居は戦災で焼失した。新たに建てられた岡本太郎邸（記念館）は、

所在地 東京都港区南青山6-1-19
 東京メトロ銀座線・千代田線・半蔵門線
 表参道駅より徒歩8分
 開館時間 10:00～18:00（入館は17:30まで）
 休館日 火曜日（祝日の場合は開館）
 年末年始（12/28～1/4）及び保守点検日
 観覧料 一般 ¥600(¥500)
 小学生 ¥300(¥200)
 ※（ ）内は15人以上の団体料金
 電話 03-3406-0801
 URL <http://www.taro-okamoto.or.jp/>



ル・コルビュジェの弟子、坂倉準三の設計である。コンクリートブロックを積んだ壁に凸レンズ型の屋根を冠した、岡本太郎に似つかわしいユニークな「顔」をもつ、住宅建築の傑作だ。「凸レンズ」は正面からみると目玉のようにも見えないが、裂け目のようにも見えて、示唆的である。写真をカラーで見せられないのが残念。坂倉による無彩色の器に、岡本太郎のカラフルな作品が映える。

さて内部に行こう。家だから、靴を脱いで入る。広い吹き抜けの玄関ホールからまず2階へ、坂倉の明快なレイアウトはシンプルだが、吹き抜けを横切る渡り廊下は、まるで空中を歩くようでアクロバティックだ。2階の広間に展示された絵画を観たあとは階下へ。住居だった当時そのままのリビングルームとアトリエが見物できる。アトリエは、朝夕を問わず安定した光が入るよう、北側一面に大きな窓を設けている。それは柔らかな独特の光で、視覚が研ぎ澄まされてゆくようだ。このアトリエの光景は、岡本太郎が見た光そのままなのである。

緑に囲まれた前庭では、そこかしこ置かれた岡本太郎作品を五感で体験。有名な「座ることを拒否する椅子」に思う存分座れる。椅子に刻み込まれた大きな目玉が尻を凝視する、堅い凹凸が肉に食い込み骨を打つ、でも、椅子に顔があつたつていいじゃないか。そして、岡本太郎ツアー最後のイベントは、テレビCMで知られた久国寺の梵鐘、全体にトゲトゲの生えた、あの鐘である。傍に鐘木が置いてあるので、これは人目をはばからず思いきり打ち鳴らすのが良い。打ち疲れたら、隣接するカフェでひと休み。お疲れさまでした。

もっと作品を堪能したいという方には、あわせて川崎市岡本太郎美術館 (<http://www.taromuseum.jp/>) にも足をのばすことをお勧めする。

（法政大学出版局 伊藤祐二）

大学出版部ニユース

▼二〇〇四年度第一回幹事会を開催

初夏の碧天さえわたる五月二八日、神奈川県湘南キャンパスの東海大学出版会で、今年度の第一回幹事会が開かれた。

昨年は協会創立四〇周年で、「感謝の会」や記念ブックフェアを開催して、事務局、四部会、関西支部の新体制をスタートさせた。明けて新年度の劈頭、渡邊勲幹事長は挨拶の中で ①会則及び運用細則改正にともなう組織・体制の変更をふまえた発展的な活動展開 ②韓国・中国大学出版部協会との新たな交流 ③二〇〇五年度への事業継承と組織基盤の強化、などを方針にかかげた。そのあと事務局、四部会の報告がつづき、議事がすすんだ。

結局予定を三〇分あまりこえて幹事会が終り、メンバーはそのあと東海大学松前記念館を見学した。夜は、例年のごとく新旧幹事が顔を揃えて懇談に花を咲かせることになるのだが、この日は皆で登山電車に乗って移動、箱根強羅にある法政大学箱根荘に集まった。ほどよい疲れの一日であった。



iiV Book Loungeの
放映画面



▼ブックラウンジ まもなく一周年
昨年一月から始まった、インターネット放送による大学出版部の学術書紹介iiV Book Loungeがまもなく一周年を迎える。毎週1点の紹介ペースだが、累計ではすでに四〇点を数え、六千万人ともいわれるインターネット利用者に動画と音声で情報提供している。

八月第一週分の放送からは、さらに新しい試み加わる。Book Loungeのページを訪問したユーザが、本を購入したと思ったら場合、発行元出版社だけでなく、Amazon.co.jpでも買えるようになるのだ。ページの「この本をAmazonで購入する」のアイコンをクリックすると、そのままAmazonサイトの当該図書販売ページに誘導されるようになっていた。さまざまに、Amazonならではのサービスのあるショッピングサイトなので、利用者にも便宜が図られるというわけだ。「便利な」というコンセプトを手離せなくなっただけの人たちには、うっかり買い忘れていつのまにか在庫切れになる悲劇を回避する意味も含め、歓迎されるだろう。

北海道大学図書刊行会

▼河野昭一監修「植物生活史図鑑シリーズ」『春の植物1』『春の植物2』（A4判・各三二五〇円）種子から芽生えて花を咲かせ、実を結んで次世代を残すまでの「生活史」を、カラーイラストと写真で紹介。各巻一〇種収録。▼由田宏一編「有用植物和・英・学名便覧」（A5判・三九九〇円）和名や学名をすばやく知るための便利帳。二四四六種について和名三九四六と英名三七八二を収録。▼村上隆著『北樺太石油コンセンション1925-1944』（A5判・八九二五円）両大戦間期における石油利権会社の設立・経営・解消の過程を詳細に分析。ソ連が石油利権を国内経済のなかでどう位置付け、如何に実践したかを解明し、同時に日ソの外交局面で果たした利権の役割を政治・外交・経済の視点から考察。▼北海道大学編『北大・未知へAmbition』（B5判・一八九〇円）北大における「21世紀COEプログラム」一〇件と「特色ある大学教育支援プログラム」一件の内容・構成メンバーをできるだけ平易に紹介、北大の研究・教育の最先端の現状がビジュアルに理解できる。

東北大学出版会

▼佐藤光源・櫻井映子編「覚せい剤精神病と麻薬依存」（B5判、一九四頁、三一五〇円（税込））薬できれいに瘦せたいの？薬でミラクル感を感じたい？絶対ダメ。覚せい剤や規制薬による深刻な健康被害や、薬の乱用が蟻地獄にたとえられるわけを知りましょう。本書は、厚生科学研究医薬安全事業「規制薬物の依存メカニズムと慢性精神毒性に関する神経科学的研究」に参加した研究者がそれぞれの分野の最新情報をわかりやすく解説したもので、日本から世界に発信されている新しい情報が紹介されている。▼木下悦二著『我が航跡―国際経済論探求の旅―』（四六判、二四六頁、一七八五円（税込））戦後日本の国際経済学研究をリードしてきた著者の学問的自信。六〇年余の研究生活の時々当面した課題とは何であったか、それらにどう取り組み、理論をまた現状分析を組み立ててきたのかを、自ら体系的に語る。国際価値論（貿易論）、国際通貨論の理論的・体系的展開、日本の貿易、戦後世界経済、中国経済に関する独自の理論化と歴史を見据えた根底的な性格付けを特徴とする。

流通経済大学出版会

▼宮脇岑生著『現代アメリカの外交と政軍関係―大統領と連邦議会の戦争権限の理論と現実』（A5判・四二〇〇円）アメリカでは歴史的に見て、外交・軍事政策をめぐる大統領と連邦議会の支配力は振子の運動のような動きをしてきたといわれている。その内容は、建国以来論議されてきた戦争権限の問題から対外政策形成、文民統制問題、更には安全保障など広範囲にわたっている。本書は、議会復権の第四期といわれているヴェトナム戦争とウォーターゲイト事件から九・一一同時多発テロ事件までの時期を中心に、アメリカの外交・軍事政策の形成における大統領と連邦議会の活動を、戦争権限に焦点を合わせてまとめたものである。▼生田保夫著『改訂版』交通学の視点』（A5判・二六八五円）この度の改訂は、人類生存の基礎に関わる地球環境問題を念頭に論じたものである。社会活動のグローバル化が進展する時代にあつては交通量、交通距離は増大する一方である。本書は、この環境問題を交通学の視点で論じたものである。

慶應義塾大学出版会

▼小熊英二著『市民と武装―アメリカ合衆国における戦争と統規制』（一七八五円）日本と日本人を問い続けてきた気鋭の論客が、自由の国であると同時に軍事国家でもあるアメリカの原点をラディカルに検証し、アメリカという新たな（帝国）の本質を鮮やかに解き明かす。

▼小川原正道著『大教院の研究―明治初期宗教行政の展開と挫折』（三九九〇円）国家神道体制はいかに築かれたのか。明治初期の宗教行政の中核を担った「大教院」の設立から制度、活動、崩壊までの過程を新発見資料をもとに論じる。

▼J・L・ギャデイス著、赤木完爾・齋藤祐介訳『歴史としての冷戦―力と平和の追求』（一八三〇〇円）キューバ危機までの冷戦史を、イデオロギー闘争の視点で緋いて定評ある政治史読み物の翻訳。

▼T・クラシアス・C・チャネル著、杉野俊子・中西千春・河野哲也訳『大学で学ぶ議論の技法』（二二〇〇円）論理的な思考を育て、論理的な文章を書くための実践テキスト。時事的な社会問題を論じた文章の実例が数多く採り上げられ、読むだけで刺激に富むユニークな実用書。

産業能率大学出版部

▼波頭亮著『思考・論理・分析―「正しく考え、正しく分かること」の理論と実践』（二二二〇円）

本書では「思考」とは何か。言い換えるなら「ものを考える」という頭脳作業は何をしていることなのか。論理的存在とはどうゆうことなのか。何を行えば最も効率的に正しい答えを得られるかという「合理的分析プロセス」の具体的作業と有用なテクニクについて解説した。

論理的に思考する力が強化されると、それまで良くわからなかった複雑な状況がすっきりとシンプルに見えるようになり、なぜ今良くわからないのか、わかるようになるには何が判明すれば良いのかが、自身納得してわかるようになる。

▼佐藤富雄著『人生100年時代の「生き方健康学」』（一四七〇円）
現在オプティマル・ヘルスという健康観が生まれています。心も身体も生き生きとした最高の健康状態をいいます。その状態をいかに維持していくかに焦点が当てられています。

本書は、口ぐせ理論のドクター佐藤が解く、元気で100歳まで生きられる方法。

専修大学出版局

▼U・P・ヤウヒ著／菊地健三訳『性差についてのカントの見解』（三三七〇円）近代的な意味で「女性蔑視の源流」の一つとさえみなされてきたカントだが、生存時には公刊されていなかった「講義ノート」や「メモ類」を読むと、また別のカント像が見えてくる。カント晩年の友人のフェミニズムの視点に基づく著作から推量しても、カントは十分にフェミニスティッシュであったというのが、著者ヤウヒの行き着いた結論である。

▼小川由季・小川壽夫著『母と子と戦争と―集団疎開六十年』（一五〇〇円）
母と子の交信の中から浮び出る「戦争」の現実。本書は、今なお消えることのない集団疎開児の心の軌跡を、家族との往復書簡・日記帳などの資料で鮮やかに蘇らせる。



『性差についての
カントの見解』
定価 3,570円

大正大学出版会

▼協会に加盟して一年、皆様にご助言をいただきながら、なんとかか過すことができた。お陰さまで、今年はいままでで、『グローバル時代の宗教間対話』（星川啓慈・山梨有希子共著）、「梵蔵漢対照『維摩経』「智光明莊嚴経』」（大正大学総合仏教研究所梵語仏典研究会編）、「家族の幻影—アメリカ映画・文芸作品にみる家族論—」の三点を刊行した。

▼『史脈瑞應—「近代説話」からの遍路—』（寺内大吉・永井路子著四六判270頁）を近刊予定。歴史小説家の永井路子氏と僧侶であり作家でもある寺内大吉（成田有恒）氏の論述と対談からなる。司馬遼太郎、黒岩重吾氏をはじめ、永井、寺内両氏等多くの直木賞作家が生まれた「近代説話」、その創刊の経緯、同人達のこと、さらに本学出身の寺内氏、本学で小説執筆のために仏教・戒律を学んだ永井氏が、仏教文学を中心に、小説執筆の動機、二人の生い立ち、仏教と日本人などについて論じ、そして語り合う。年齢を感じさせない二人の熱意が伝わる一冊。

玉川大学出版部

▼『商業化する大学』（D・ボック／宮田由紀夫訳・四四一〇円）産学連携やスポーツを重視し、名声と利益を追い求めるアメリカの大学。営利目的の商業活動は大学の信望を損なってはならないのか。元ハーバード大学学長が警鐘を鳴らす。

▼『日本の高等教育政策—決定のメカニズム』（T・J・ペンベル／橋本鉦市訳・四七二五円）戦後の様々な状況下で政治的に重要な高等教育政策はいかに策定され、いかなる結果をもたらしたのか。日本の高等教育の政策決定過程分析の嚆矢。



▼『海洋アジアと日本の将来—続・文明論の現在』（入江隆則著・二六二二五円）

『海洋アジア』と『大陸アジア』の相克がダイナミックに展開する中で、日本の果たすべき役割とは何か。二十一世紀日本の政略を語る、文明論の現在第二弾。

中央大学出版部

▼山下泰子・植野妙子編著『フェミニズム国際法学の構築』（五七七五円）ジエンダー視点を縦軸に、女性差別撤廃条約選択議定書を横軸に、フェミニズム国際法学の構築を試み、女性政策の課題と展望を提示する。

▼眞田芳憲著『イラク戦争 イスラーム法とムスリム』（一九九五円）イスラーム法学者がイラク戦争をイスラームの立場に立ってムスリムの心情にまで立ち入り、イスラーム法を視野に入れて論及する。

▼小堀憲助著『知的（発達）障害者—福祉思想とその潮流』（二〇四五円）知的障害者福祉の実践の現場の視座から、世界の福祉思想の潮流を見据えて、21世紀における知的障害福祉のあり方を問う。

▼相馬久康著『架橋の試み 一九六二—二〇〇三年』（二六二五円）中央大学法学部で四十二年間教えた著者による、日本ならびにドイツ近・現代文学にかかわる論考、研究ノート、エッセイ、書評、恩師の追悼文等から成る論集。

▼山口四郎著『口誦 ゲーテ詩集』（一九四〇円）ドイツの訳詩・韻律論に造詣の深い作者によるゲーテ詩集の決定版。

東京大学出版会

▼西村幸夫著『都市保全計画―歴史・文化・自然を活かしたまちづくり』（一五七五〇円）

本書は、日本で初めてまとめられた、まちづくりのハンドブックである。

ここでいう都市とは、いわゆる「都会」のみならず、人の手になる環境全般をさす。それは人間がどのようにでも改変・開発できる白地図ではなく、それぞれの土地に固有の歴史・文化・自然の文脈を有している。いま都市計画・都市工学においてもっとも求められているのは、こうした地域の固有性を保全しつつ発展していくためのさまざまな知恵にほかならない。

本書は、まちづくりに関する思想・歴史・制度・方法について、国内の先進的な事例はもとより、欧米・アジア各国の事例をも豊富に紹介しながら、多数の写真・図とともに総説されている。またユネスコの世界遺産など国際的な取り組みについても概説し、さらに詳細な年表と関連法律の条文も付す。網羅的な事典であると同時に、体系的に学べる教科書でもある。

東京電機大学出版局

インターネットが爆発的に普及したこの十年を顧みるとき、本来果たすべきであった役割や、意図した内実から離れてしまったWebサイトの対する反省や批判もある。▼パトリック・リンチ他著『Webサイトスタイルガイド―サイト構築のための基礎と原則』（三二五五円）

真に有益なサイトの構築を、原則から考え直すためのデザインガイドライン。良質なサイトのコンセプトやデザインを具体的に挙げ、基本設計から文字組、グラフィック、またアクセシビリティまでを考える。▼ロバート・ヤコブソン編『情報デザイン原論―「ものごと」を形にするテンプレート』（三九九〇円）

テクノロジーやメディアの急速な発展により、質的な変化を求められ始めた「情報」。ヒトにとっての使いやすさという意味を考え、「情報デザイン」の流れを拓いた一冊。ともに篠原稔和監訳。



東京農業大学出版会

〈カラー写真集1000シリーズ〉

▼小笠原1000の素顔 I ポニン もうひとつのガイドブック 小笠原1000の素顔編集委員会編

小笠原の歴史や生活などについて写真とエッセイで解説。ポニンは、Bonin…無人島の意味でかつての小笠原の呼称。

平成一六年四月／B六判

一六〇頁／税込価格一八九〇円

▼小笠原1000の素顔 II ドンガラ もうひとつのガイドブック 小笠原1000の素顔編集委員会編

小笠原の自然や農業などについて写真とエッセイで解説。ドンガラ、Don g araとはDon't Forgetの意味。自然の楽しみ方は1000人1000色。しかし、自然といかに向き合うか。本書で考えてほしい。

平成一六年三月／B六判

一八四頁／税込価格一八九〇円

▼新・めん羊の繁殖技術 福井 豊著

めん羊の繁殖技術の基礎テキスト

平成十六年四月／A五判

一二九頁／税込価格一五七五円

法政大学出版局

▼『宗教改革史論』(『ピエール・ベール著作集』補巻・野沢協全訳解説・A5判・五万七五〇円) ベールの出発点をなす初期の二大作、『マンブール氏の《カルヴァン派史》の一般的批判』およびその続篇『マンブール氏のカルヴァン派史の一般的批判』の著者の新たなる手紙』の全訳。マンブールの書の全訳を付す。

▼『紅花(べにばな)』(竹内淳子著・四六判・三五七〇円) 藍とともに日本の代表的な染料植物であった紅花は、顔料、薬用、食用等に幅広く利用されてきた。本書は、紅花の栽培、加工、利用の実際を現地を探訪し、紅花と関わってきた人々からの聞き書きを集成。忘れられた紅花文化を復元しつつ、自然素材の豊かな味わいと美を見直す。

▼『聖書時代の秘宝——聖書と考古学』

(A・ミラード著・鞭木由行訳・A4変判・六六一五円) 中近東での発掘の歴史と考古学者たちのエピソードを語り、発掘物の解釈と聖書の記述との関連性を考察する。ほぼ全頁にわたってカラー図版を配し、古代の人々の生活にも思いを馳せる、考古学と聖書の世界への誘い。

放送大学教育振興会

▼放送大学授業科目別受講者数ランキング(平成十六年一学期。カッコ内は受講者概数)単位百名。外国語を除く)

- ①心の健康と病理(59)
- ②感染症と生体防御(48)
- ③心理学初歩(35)
- ④人体の構造と機能(35)
- ⑤疾病の成立と回復促進(32)
- ⑥生涯発達心理学(30)
- ⑦リハビリテーション(27)
- ⑧脳の健康科学(27)
- ⑨看護学概説(24)
- ⑩家族のストレスとサポート(24)
- ⑪心理臨床の世界(24)
- ⑫心理学研究法(24)
- ⑬人格心理学(24)
- ⑭問題解決の発想と表現(23)
- ⑮幼児の教育と保育(23)
- ⑯発達障害児の心と行動(22)
- ⑰ユング心理学(21)
- ⑱カウンセリング概説(21)
- ⑲現代科学と医療(21)
- ⑳食品の成分と機能(20)

今年も心理学・健康・医学に関する科目の人氣が高い。看護師・司書教諭など資格取得関連科目も増加している。

▼十八年度の作業がスタート

七月十六日平成十八年度開設予定科目の主任講師会議が開催された。専任教員・客員教員、ディレクター、編集担当者等が、出席した。十八年度印刷教材編集作業の正式スタートである。

武蔵野美術大学出版局

〈MAUライブラリー刊行について〉

武蔵野美術大学がこれまで培ってきた教育と研究の成果をわかりやすいかたちで読者のもとに届けるため、二〇〇四年四月『MAU(Musashino Art University)ライブラリー』を創刊しました。美術・デザインをはじめ、表現と文化の諸領域にかかわる分野をとりあげていきます。

▼『ネパール周遊紀行』MAUライブラリー①(田村善次郎著・四六判・一九九五円) チベット(中国)とインドに挟まれたネパールは、仏教やヒンドゥー教の影響を受けながら独自の文化を展開してきた。文化人類学者の著者が辿ったネパール高地の集落の生活や習俗、儀礼を多数の写真とともに紹介。

▼『塾の水脈』MAUライブラリー②(小久保明浩著・四六判・一八九〇円)

江戸時代から現代までの「塾」の変遷から、学校制度だけでは語り尽くせない教育のあり方に迫る。近世に展開した家塾私塾は明治維新以後も近代学校制度と共存しながら、今日の「受験塾」に至る。数世紀にわたる流れを歴史研究の立場から初めて明らかにした。

明星大学出版部

▼高島秀樹著『社会調査—社会学の科学的研究方法—(改訂二版)』A5判／二二三頁／二三〇〇円

新聞やテレビ報道を見れば明らかであろうに今日数多くの社会調査が実施されているが、その調査結果が信頼を得るためには、確立された一定の手続きに従って社会調査が実施されていることが必要である。社会学の研究方法としての社会調査であれば、その手続きになお一層の厳密さが求められる。

本書は著者が一九九七年に刊行した『社会調査』を基礎に、大学における講義の経験をもとに一層の充実を図って行われたものであり、社会調査の基礎について明らかにした上で、社会調査の実施過程と諸技法を中心に、標準的な社会調査の手法を示すことを意図した書である。社会調査を実施しようと試みる者が最初に取り上げるべき書といえよう。



早稲田大学出版部

▼『帝国アメリカのイメージ—国際社会との広がるギャップ』(押村高編／三五七〇円) イラク戦争を契機として、アメリカの単独行動主義を世界はどう捉えているのか。アメリカ問題の行方を探る。

▼『アジアにおける日本企業の成功物語—市場戦略と非市場戦略の分析』(V・K・アガワル／浦田秀次郎編、浦田秀次郎監訳／四七二五円) 経済危機を乗り切り、成功した日本企業の戦略を考察。

▼『シリーズ社会情報学への接近』全4巻完結。最終回配本第3巻『情報秩序の構築』(伊藤守・林利隆・正村俊之編／三三六〇円) 氾濫する情報にどう対処すればよいのか。情報処理の実態を検証。既刊 1 パラダイムとしての社会情報学 2 電子メディア文化の深層／4 グローバル社会の情報論(各三三六〇円)



東海大学出版会

▼二〇〇四年四月より、日本の森林と生物多様性という観点から日本の森にみる生物との関係を、多様性をキーワードに探る『日本の森林—多様性の生物学シリーズ』全5巻の刊行が開始された。

第一巻は中静透著『森のスケッチ』(定価三三七〇円)。森林がどんなにダイナミックなものであるか、その中で樹木がいかに多様な生き方を持っているか解説する。

第二巻は佐橋憲生著『菌類の森』(定価三一五〇円)、森の構成者としての菌類(カビ、キノコ)を解説する。

続刊は大井徹著『獣たちの森』(予価三三六〇円)、日野輝明著『鳥たちの森』(予価三三六〇円)、鎌田直人著『虫たちの森』(予価三三六〇円)で、哺乳類、鳥類、昆虫類などの生物と森林との関係を探る。



名古屋大学出版会

- ▼小野清美著『保守革命とナチズム』E・J・ユングの思想とワイマル末期の政治』（六〇九〇円）今日なおアクチュアルな意味をもつ保守革命の政治思想を描きだし、ワイマルの悲劇に切り込んだ力作。
- ▼G・オーウェン著 和田一夫監訳『帝國からヨーロッパへ』戦後イギリス産業の没落と再生』（六八二五円）イギリスの「ものづくり」は復活したか。主要産業を徹底分析し、経済衰退説に挑戦。
- ▼本野英一著『伝統中国商業秩序の崩壊―不平等条約体制と「英語を話す中国人」』（六三〇〇円）近代西洋の経済秩序原理との衝突によって何が起こったのか。買辦の役割に注目して経済紛争を分析。
- ▼黒田光太郎・戸田山和久・伊勢田哲治編『誇り高い技術者になるう』工学倫理ノススメー』（二九四〇円）プロとして責任ある仕事をするために、何に配慮し日々の仕事の中でどう行動すべきか。
- ▼土井正男・滝本淳一編『物理仮想実験室―3Dシミュレーションで見る、試す、発見する』（四四一〇円）振り子の運動や光の反射などの物理現象を、付属のCDを使って計算機の中で体感しよう。

三重大学出版会

- ▼田中皓正著『オンキユウ―四〇年の歩み』B5特装版、二七〇頁（五〇〇〇円＋税）
- I 基盤確立期 昭和三八年～
II 拡大期 昭和四九年～
III 安定成長期 平成二年～
IV 新しい消費の波（平成十五年～）
- 株式会社「オンキユウ」の歴史を四期に纏めて綴る。四国の豊後水道に養殖餌料販売業者として起業したオンキユウは、以後、稚魚の孵化・販売から成魚の買付け、販売までを手がけて株式公開（店頭登録）を果たす。年商は五〇〇億円で、一企業としては日本最大の取扱高になる。そのオンキユウが東京進出の際に経験した「東西の味覚の壁」は『バカの壁』を彷彿とさせる。また試行錯誤の末に成功する「株式公開」事業は、自営業者には一読の価値がある。また成長企業の経営研究の資料としても最適である。
- ▼松永守他編『シミュレティブ力学』B5、二二二頁。定価一七〇〇円＋税。
- シミュレーション実習用教科書。シミュレーション・ソフトは(株)日本MSCのworking Model D2を用いる。

京都大学学術出版会

- ▼『代數幾何学』（廣中平祐 講義／森重文 記録／丸山止樹・森脇淳・川口周 編）B5判・二〇〇頁・二九四〇円
- 一九七〇年にフィールズ賞を受賞したばかりの廣中平祐ハーヴァード大学教授（当時）が、七一年秋から七二年初頭にかけて京都大学数理解析研究所に滞在したおりに、同大学理学部でおこなった講義を、受講していた学生の一人が記録していた。九〇年にやはりフィールズ賞を受賞することになる森重文氏（現・京都大学数理解析研究所教授）である。このノートを清書して印刷したものが、七七年に数理解析研究所レクチャーノートの一冊として発行され好評を博したが、市販品ではなく、学外者には幻の入門書であった。
- フィールズ賞受賞者が二〇年後の受賞者をインスパイアした名講義に、京大理学部で教鞭を執っている三人が加筆修正し、註釈と可換環論の初歩およびカテゴリー論についてまとめた附録をつけ、代數幾何学の標準的な教科書として世に送る。簡潔で奥深い講義録。

大阪経済法科大学出版部

▼吉田 廣著『フランス小説『女の一生』を斬る！』—小説文の成り立ちを探る—(二一〇〇円税込)モーパッサン作『女の一生』の全一四章をナラトロジー(物語学)の視点から分析し、解説している。各章において時間構成、話法、空間構成語り手と登場人物、レトリック、文章構成などの各視点から分析を行っている。

▼金哲雄著『経済史へのアプローチ』(二一〇〇円税込)本書は大学における「一般経済史」や「経済史入門」の教科書として書かれた。経済史の基礎的理解に役立つ経済史の理論や、経済史全体に通ずる比較史的論点を取り上げながら、近代資本主義を経済史の主要な対象に経済史へのアプローチを試みている。第一章ではマルクスの史的唯物論などの経済史学とヴェーバーの宗教社会学やゾンバルトの移住論、第二章ではイギリス、ドイツ、アメリカにおける工業化の外観とフランス工業化の遅れや、近代西欧におけるユグノーの経済史的役割、第三章では東アジアの経済発展史と韓国工業化の特質や、アジア経済史における儒教とプロテスタントイデオロギズムについて論述している。

大阪大学出版会

▼大阪大学編『大阪大学歴代総長餘芳』四六判・二五四頁・二九四〇円 第六番目の帝国大学として設置されて約七〇年。大阪大学の歴史は、同時に歴代総長の物語であった。それぞれの総長にまつわる話を大阪大学名誉教授が執筆。

▼天野文雄著『現代能楽講義—能と狂言の魅力と歴史についての十講—』四六判三二〇頁・二四一五円 現代では「巨大なブラックホール」として十分に理解されていない能楽(能と狂言)について、歴史の変遷という独自の視点により全体像を明らかにし、その魅力に迫る。

▼石井博昭・森田浩・齋藤誠慈著 大阪大学新世紀レクチャー『不確定・不確定性の数理』A5判・二四八頁・二一〇〇円 ランダム・ファジィ現象を科学解析。

▼倉光成紀・増井良治・中川紀子著 大阪大学新世紀セミナー『生物学が変わる！—ポストゲノム時代の原子生物学—』A5判・一〇〇頁・一〇五〇円 生命の全情報たった一つの細胞で読める。

▼増田幸子『アメリカ映画に現れた「日本」イメージの変遷』A5判・二三五頁・二五二〇円 初期〜現在日本人像の変遷。

関西大学出版部

▼田中俊也著『思考の発達についての総合的研究』(A5判・二六二・三五円)課題解決の過程、人間の発達過程、人類の思想の発達過程に共通な、人間の側の内的な構えや仮説に基づく情報探索・情報処理のありさまを総合的に捉えた書。思考や探求の論理を科学についての心理学という視点から解明した研究書・啓蒙書。

▼山住勝広著『活動理論と教育実践の創造—拡張的学習へ』(四六判・二八三五円)活動理論は、人間の協働的活動の新たな形態をデザインする理論である。本書は、活動理論から今日の学校教育の改革を展望し、学校の創造的教育実践に挑戦する活動理論の試みを提起したものである。

▼林 英夫著『郵送調査法』(A5判・三九九〇円)アカデミックとビジネスの両分野における郵送調査法に関する基礎的および実践的な研究過程で蓄積された内外の文献やデータを集約した、わが国で最初の本格的な専門書である。データ収集技法として郵送調査法を活用している学術研究者や、市場調査や世論調査の実務家にも、その存在意義を再認識し、改善する手助けとなろう。

関西学院大学出版会

新刊

▼窪寺俊之・谷山洋三・伊藤高章

『スピリチュアルケアを語る―ホスピス、ビハラの臨床から』スピリチュアルケアとは何か？ホスピスなどの現場から実践を語る。(二二六〇円)

▼持続可能性研究会(天野明弘・大江瑞絵編著)

『持続可能性社会構築のフロンティア』これからの企業経営において避けて通れない「持続可能性社会」構築のための取り組みを紹介。(予価二九四〇円)好評既刊

▼後藤明・松原好次・塩谷亨編

『ハワイ研究への招待―フィールドワークから見える新しいハワイ像』(二六二五円)

▼関西学院大学キリスト教と文化研究センター編(二四一五円)

『民と神と神々と―イスラーム・アメリカ・日本を読む』

▼北米エスニシティ研究会(田中きく代・高木真理子他)編(二八三五円)

『北アメリカ社会を眺めて―女性軸とエスニシティ軸の交差点から』

九州大学出版会

▼関口正司著『教育改善のための大学評価マニュアル―中期計画実施時の自己評価に役立つ25のポイント』(A5判・一四八頁・一四七〇円)本格的な大学評価の時代に応える実務的・実践的な大学評価(教育活動面での評価)マニュアル。

▼熊本県立大学総合管理学会編『新千年紀のパラダイム―アドミニストレーション』(A5判・上巻二九六頁、下巻四一四頁・各三九九〇円)administrationは、所与の目的を実現するための集団的協働行動である。新千年紀における新パラダイム、アドミニストレーションの構築を目指す同大学総合管理学部創立十周年記念論文集。

▼高橋隆雄編『生命と環境の共鳴』(A5判・二六〇頁・二九四〇円)総合性と共感の観点から生命と環境を捉える。熊本大学生命倫理研究会論集5(全6巻)

▼辻雅男著『アジアの農業近代化を考える―東南アジアと南アジアの事例から』(新書判・一四〇頁・一〇五〇円)稲作農業の近代化と伝統的農村共同体の変容。KURARO(九州大学アジア総合研究センター)叢書。

部会だより(編集部会)

正副部会長会議を開催

さる六月一〇日に編集部会の正副部会長四名が東京大学出版会会議室に集まって、今年度の方針などを話し合った。四月からは新任の部会長に変わったので、顔合せにもなった。本誌については製作・配本状況のほか、発行のPRや効果的な配布法も組上にのせ、これに関しては各出版部もそれぞれに努力すべきだとの意見がでた。これまで多大な刊行助成実績のある日生財団や、同じように学術書刊行助成に貢献している諸団体の記事も載せたらどうかとの意見もでて、今後煮詰めることになった。

また、夏秋の研修会で予定されているケース・スタディ発表(夏季は東京電機大学出版局、秋季は北海道大学図書刊行会が担当)について、テーマの掘り下げやフォロー報告などが検討された。秋学研修会は一〇月二二、二三の両日、関西の神戸市周辺で行い、図書館員との交流や親睦会などを予定している。興味のある方々は、是非ご参集ください。

法人化へむけて

成果公開の領域については緩やかな転換期に、出版・経営実績は明らかに踊り場状況にあるというのが、ここ数年の実感である。柳原・鈴木と連続した取次の倒産の余波を受けたことを言い訳したいところだが、創立一五年の小さな歴史のなかで、二度にわたる節目の二度目が終わろうとしているのだ、と総括するほうが正しいだろう。

そこで、この転換をできれば主体的に呼び込もうとして、一昨年度末に「中期五カ年経営計画」なるものを策定した。総花的な作文にすぎないとも思うが、継続的に事業をやり、それをプラスのほうに舵取りし続けていくには、やはり絵が必要であろう。われわれの場合、母体大文学とは独立した経営体であるのでなおさらである（もちろん、この計画も大学に追認してもらっている）。中身をひとつひとつ実行に移していくのは、むろん大変である。日常の活動のなかに複眼的志向をこめてやっていかなければならない。大枠と個別課題と。こうした場合に、事柄を整理し、組織的にも集約点を明確にするため、何か踏み台がほしい。そこで、この中間点に「法人化」を設定した。

法人化そのものは、単なる事務手続きにすぎない。直接的な効果はもちろんあって、それだけが目的であれば、外部環境が整えばいつでも可能であろう。じっさいに、われわれにとって、この時期というのは国立大学の法人化に重なることになり、厳密にはこの時期の選択というのはかなりインパクトのあることになろう。これは、間違いなく幸運とすべきである。が、要は、それ以上に内なるインパクト効果を、より重視したいということである。何を分かり切った幼稚なことを、と笑われそうだが、少なくとも法人化についての私自身のとらえかた、覚悟のようなものはこの程度である。

法人は中間法人を選択した。その準備に一年をかけ、来年度には実現したいと思っている。

小野利家（京都大学学術出版会）

関西支部だより

編集後記

高校の現代国語の教科書は、今でも覚えていた。といっても内容ではなく、表紙に印刷されていた絵が印象に残っているのである。緑の林を背景に白い馬が描かれているのだが、何ともいえず清廉な感じを受けた。

当時の私には絵の善し悪しなどわからないが、ただ「いいな」とか「欲しいな」との思いだけで、題名だけを心に刻みつけた。

十数年後、紀伊國屋書店でその複製画と再会し、詳細を知ることになる。教科書に記載されていた絵の題名は「緑響」（部分）、東山魁夷の作品の一部分だった。

.....*

大学出版部にとって教科書は、専門書、教養書と共に出版物の中核をなすものです。そこで本号は、教科書というテーマで特集を組みました。

特に本号では、教科書にまつわる思い出や考えを、八名の執筆者によりエッセイ風の読み物として掲載することも試みました。このような構成は初めてですが、特集テーマの選定とともに、今後も様々な挑戦をしていくつもりです。

小野朋昭

（東海大学出版会・『大学出版』編集長）

日本大学出版部協会加盟出版部一覽

北海道大学図書刊行会

060-0809 札幌市北区北9条西8丁目 北海道大学構内
TEL 011-747-2308 FAX 011-736-8605

東北大学出版会

980-8577 仙台市青葉区片平 2-1-1 東北大学構内
TEL 022-214-2777 FAX 022-214-2778

流通経済大学出版会

301-8555 龍ヶ崎市平畑 120
TEL 0297-64-0001 FAX 0297-64-0011

聖学院大学出版会

362-8585 上尾市戸崎 1-1
TEL 048-725-9801 FAX 048-725-0324

聖徳大学出版会

271-8555 松戸市岩瀬 550
TEL 047-365-1111 FAX 047-363-1401

麗澤大学出版会

277-8686 柏市光ヶ丘 2-1-1
TEL 04-7173-3331 FAX 04-7173-3154

慶應義塾大学出版会

108-8346 港区三田 2-19-30
TEL 03-3451-6926 FAX 03-3451-3124

産業能率大学出版部

103-0028 中央区八重洲1-3-19 辰沼建物ビル7階
TEL 03-5205-2255 FAX 03-5205-2470

専修大学出版局

101-0051 千代田区神田神保町 3-8-3 専修大学4号館
TEL 03-3263-4230 FAX 03-3263-4288

大正大学出版会

170-8470 豊島区西巢鴨 3-20-1
TEL 03-5394-3026 FAX 03-5394-3038

玉川大学出版部

194-8610 町田市玉川学園 6-1-1
TEL 042-739-8935 FAX 042-739-8940

中央大学出版部

192-0393 八王子市東中野 742-1
TEL 0426-74-2351 FAX 0426-74-2354

東京大学出版会

113-8654 文京区本郷 7-3-1 東京大学構内
TEL 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958

東京電機大学出版局

101-8457 千代田区神田錦町 2-2
TEL 03-5280-3433 FAX 03-5280-3563

東京農業大学出版会

156-8502 世田谷区桜丘 1-1-1
TEL 03-5477-2562 FAX 03-5477-2643

法政大学出版局

102-0073 千代田区九段北 3-2-7
TEL 03-5214-5540 FAX 03-5214-5542

放送大学教育振興会

105-0001 港区虎ノ門 1-14-1 郵政互助会琴平ビル3F
TEL 03-3502-2750 FAX 03-3592-2482

武蔵野美術大学出版局

180-8566 武蔵野市吉祥寺東町 3-3-7
TEL 042-223-0810 FAX 042-222-8309

明星大学出版部

191-8506 日野市程久保 2-1-1
TEL 042-591-9979 FAX 042-593-0192

早稲田大学出版部

169-0071 新宿区戸塚町 1-104-25
TEL 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406

東海大学出版会

257-0003 秦野市南矢名 3-10-35 東海大学同窓会館内
TEL 0463-79-3921 FAX 0463-69-5087

名古屋大学出版会

464-0814 名古屋市中千種区不老町 1 名古屋大学構内
TEL 052-781-5027 FAX 052-781-0697

三重大学出版会

514-8507 津市上浜町 1515 三重大学出版ホール内
TEL 059-232-1356 FAX 059-232-1356

京都大学学術出版会

606-8305 京都市左京区吉田河原町 15-9 京大会館内
TEL 075-761-6182 FAX 075-761-6190

大阪経済法科大学出版部

581-8511 八尾市楽音寺 6-10
TEL 0729-41-8211 FAX 0729-41-9979

大阪大学出版会

565-0871 吹田市山田丘 1-1 大阪大学事務局内
TEL 06-6877-1614 FAX 06-6877-1614

関西大学出版部

564-8680 吹田市山手町 3-3-35
TEL 06-6368-1121 FAX 06-6389-5162

関西学院大学出版会

662-0891 西宮市上ヶ原1番町 1-155
TEL 0798-53-5233 (内線3475) FAX 0798-53-9592

九州大学出版会

812-0053 福岡市東区箱崎 7-1-146 九州大学構内
TEL 092-641-0515 FAX 092-641-0172